建設時評

原　動　力

東北大学 災害科学国際研究所
准教授　平野勝也

「Every man over forty is responsible for his face.（40歳を超えた男は自分の顔に責任がある）」。アメリカ合衆国第16代大統領アブラハム・リンカーンが大統領時代に，大臣として勧められた人物を「顔」を理由に断った時に，その説明として述べたと広まっている名言だ。ただ，こうしたエピソードにはよくある話で，リンカーンは実際にはそのようなことを言ったことはないようだ。しかし，その真贋（しんがん）はどうあれ，名言として広まるには広まるだけの理由があるのだろう。確かに，人柄は顔に現れる。多くの人の共感が得られるからこそ，広まるのだと思う。優しい人は穏やかな顔をしているし，端正な顔立ちの人でも，意地悪な人は，どこか悪辣さが顔に滲み出るものである。筆者の主観的な感想を言えば，対象は男性に限った話でもないと思うし40まで齢を重ねなくても，20代でも十分に人の内面は顔に現れるとさえ思える。

＊　＊　＊

外見に内面が現れるというのは，実は風景も同じである。美しい棚田の景観という外見は，条件の厳しいところで地形と向き合いながら，丁寧に耕作が行われている人の営みという内面の表れである。だから，そこにあるのは決して図像的な美しさだけではない。棚田の風景が想い起こさせる人の営みの美しさが棚田の風景をより美しく，そして味わい深いものにしているのである。

以前の景観に関わる文化財保護行政は，例えば国宝である建築物であったり，伝統的建造物群であったりモノの保全に主眼があった。モノを保全するには，適切に補修を行えばそれでよかったのである。しかし，棚田のように人の営為が深く関わる景観を保全しようとすると，もちろん棚田を形作っている石積みなどは補修が可能であるが，耕作という人の営みが壊れてしまえば，それは簡単に補修できるものではない。内面である人の営みを保全しなければ，棚田の景観は保全されないのである。耕作放棄となった棚田には，過去の人の営みに思いを馳せた廃墟趣味的な美は感じられたとしても，今という時間を共有した共感を伴った人の営みへの感動は生まれにくいのだ。

すなわち，こうした人の営みまで含めて保全を考えるのが「文化的景観」であり，日本では2004年に始まった文化財保護の新しい展開である。外見を外見たらしめている内面，つまり風景を形作る原動力としての人の営みにこそ光が当てられているのである。

＊　＊　＊

まちづくりの分野でも同様の動きがある。郊外型店舗との競争にさらされ始めた一昔前の中心市街地での景観整備といえば，舗装や照明などの街路構成要素のグレードを上げたり，店の看板を統一したりと，モノ中心つまりは外見の整備であった。三角屋根など建築物そのものの統一を図れれば，先進事例ともてはやされていた。その後，各地の中心市街地は，郊外型店舗との競争に勝てず次々とシャッター商店街へと変貌していった。どれだけ瀟洒（しょうしゃ）な外見であろうが，ことごとくシャッターが降りてしまえば，それはすでに商店街ではない。

近年広がりを見せている木下斉氏らによる「稼ぐまちづくり」も，清水義次氏らによる「リノベーションまちづくり」も，質の高い空間作りもさることながら，それを維持・継続していくプログラムに重点が置かれている。持続可能なプログラムが先にあり，その事業計画に見合ったコストでの空間作りを行なっていくのである。それは経営としては当たり前のことではあるが，拡大発展の時代は，箱を作ればそれに見合った店が入るという前提に立つこともできたために，モノ（外見）優先の整備が行われてきたのである。全国にある経営が立ち行かない再開発ビルなどは，そうしたモノ優先整備の証左でもある。

店を店として持続させるプログラムは店の内面であり，そうした内面の集積が街を街たらしめる原動力となっているのだ。つまるところ，街での人の営みが継続的かつ持続的に起こるという原動力を看過したままでは良い街は決してできない。

耕作放棄された棚田もシャッター商店街も，どちらも人の営みから切り離された，つまりは内面を失った景観である。「稼ぐまちづくり」も「リノベーションまちづくり」も，中心市街地活性化の文脈で語られることが多いが，まちづくりが，文化的景観と同様に外見から内面へと踏み込んでいった新しい展開とも言えるのだ。

＊　＊　＊

2011年３月11日。あれから６年が過ぎた。犠牲となられた方の七回忌である。未だ多くの方が仮設住宅暮らしであることを忘れてはならないが，津波被災地では時間のかかっていた中心市街地と呼べる地区でも，やっと建物が建ち始めて，街らしくなりつつある。

一昨年の12月初旬，女川駅前商店街の核となる公民連携によるシーパルピア女川は完成間近だった。都市デザイナーの小野寺康さん，宇野健一さんら女川町復興まちづくりデザイン会議の皆さんと議論しながら，そして，シーパルピア女川の設計者である建築家の東利恵さんともデザイン調整を進めながら，空間的にも公民が一体となった形がほぼ姿を見せていた。そこかしこに仕掛けた工夫は丁寧に作り上げられ，狙い通りの空間構造が実体として現れたのである。関わった人間としては，喜ばしいはずなのだが，その景観はどこか空虚で不思議と嬉しいとは思えなかった。

その空虚さの正体に改めて気づいたのは，それからしばらく後の開業日のことだ。店に灯りがともり，商品が並ぶ。思い新たに商売を再開した被災商店主，心機一転，女川に来た商店主。真新しい女川の街に少しドギマギしながら，でも嬉しそうな町民。街路という公共空間に，建築という箱の中に，そうした人々の思いが宿って，街は初めて街となる。女川の街に魂が入った。そんな実感がふつふつと湧いてくる風景だった。嬉しさがこみ上げてきた。

そんなことを感じたのは，その秋に原子力災害の被災地である浪江，双葉，大熊を訪れたからなのかもしれない。見渡す限りの普通の街並み。しかし，その全てが，もぬけの殻。あまりに切ない風景であった。人の営みが風景にとってどれだけ大切なのか，改めて，そして強烈に感じざるを得ない光景だった。

＊　＊　＊

街の本質は，人々の活動にある。その原動力がうまく動いていなければ，外見も良いものにはならない。外見だけよくしても，内面のほころびが必ず外見に現れるのだ。我々専門家の仕事は，周辺環境と結びつけながら，時には内面にも口を出しながら，内面の魅力を最大限引き出すための基本的な外見を作ることにある。

女川の中心街は，齢を重ねながらどんな顔になっていくだろうか。一つだけ確信しているのは，内面の魅力が滲み出た責任ある顔に，40など待たずになることだ。その顔を見て，リンカーン大統領は，即，大臣にしてくれるだろう。もし，その内面の輝きが外面にちゃんとでてこないのであれば，専門家が形作る基本的な外見に問題があるということだ。たとえ街の本質が人々の活動にあろうが，専門家が負う責任は少しも軽くはならない。

女川だけではない，生まれ変わる街に主体として関わっている人々は，皆，輝いている。その輝きが外見にきちんと現れないのであれば，それは基本的な外見を作っている側に問題があるのだ。そんなことを銘記しつつ，未だ最後の仕上げが残る女川，石巻市中心街の川まちづくり，雄勝，鮎川，そして名取市閖上の川まちづくりに取り組もうと思う。7年目の挑戦の始まりである。